慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十二年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通三三一号）

目次

底下の凡愚……近角常観……(1)
信的生活……池山栄吉……(5)
日系軍人と裁判……木村義文……(10)
念仏詩抄……木村無相……(16)
信の旅の二つの枝折……花田正夫……(19)

第二十九巻　第一号

底下の凡愚

近角常観

私は実に底下の凡愚である、この頃つくつく自己をかえりみると、聖人が底下の凡愚と仰せられたことが、如何にも我身にふさわしくありがたい。

さてわが身をよく考えるに、多少書物を読まぬでもなく、理屈を知らぬでもなく、世界のことも幾分は見聞せぬでもないが、色々と経て来た結果を見ると、一つとして益に立つものは何もない。これに加えるに、十年己来教界において幾多の言論をなし、実行を期したことも少くはない。勿論信念上より割出したことであるから、確信はすこしも変わらぬが、自分自身としては、はや何の益にも立たぬ人間である。

信仰の問題は実に根本の生命である。この様な者が、何の幸せか仏の御慈悲を知らせていただくことの出来たのは実に無上の幸福であるが、さりながらその信仰をわが物顔にしたがるわが身は、よくよくの底下の凡愚である。

孔子は四十にして惑わずといい、孟子は、我四十にして心を動かさずと言われたが、私は今年四十にして唯底下の凡愚として残された。

ゲエテは、詩の主人公、ファーストの述懐として、

「唯われは哲学も法学も医学も、神学までも非常に勉強したが、今一人の憐むべき馬鹿として立つ。先生と呼ばれ、ドクトルと呼ばれ、十年来学生を引き廻したが、今は依然として何もわからぬことが知れた」

と云っているのも実に味ある言葉である。

これは文学上の話であるが、信仰上の感想は、なお一層切なるものがある。されど世上一般の感想は感慨にすぎないが、信仰上で自分の価値なきことを知らして貰うほど、

身の軽ろ軽ろとして嬉しいことはない。凡愚が凡愚であるということが知らしてもらえたということはありがたいことである。

今にして親鸞聖人が愚禿と名のりたまうた思召の幾分を仰ぎ奉ることができる。しかも五年間のご流罪中に名告られたのも偶然ではない。

「僧儀を改めて俗名をたまう。然ればすでに僧に非ず、俗にあらず、この故に禿の字を以て姓とす」

と仰せられてある。特に、流罪ご差免の時、愚禿として奏聞せられた時は、よくよくご自身のご感想の深かったこととうかがい奉る次第である。

人間は自分の心だけしか了解出来ぬものである。愚禿という謙遜のおことばあるといえば、世間なみなみの卑下の意味としか了解せぬ。卑下には違いないが、ご自身がいかにも自分は愚なり禿なりとのご自覚のいかばかり深かったことであろうと推したてまつる次第である。

さてさて五年間の流罪終りて御自身をご覧になれば、いかにも愚禿親鸞として残されたばかりであるとのおぼしめしでもあろう、流罪以後愚禿親鸞と書かしめたまうとある御流罪中すでにすでにその事を御感じなされたのが、いよいよ流罪終りて、心中何のとどこおるくまなく、勅免の御請にまでお書きなされたのであろう。

久々の御流罪も終り、先師法然上人も御帰洛なされているから、京都にお帰りになってつもる話をもして、久しぶりで御教化を承りたいものとお急ぎの道中、正月二十五日御往生遊ばされたとのことをお聞きになり、最早帰洛しても詮ないことと思召されて、東国におとどまりになった。当時の御身はいかに断腸の御思いであられたであろうか。そして天地の間、芒鞋竹杖、愚禿親鸞と名告られて、いかにも御身の軽いことであろう。

正法の時機とおもえども　底下の凡愚となれる身は
清浄真実のこころなし　発菩提心いかがせん
自力聖道の菩提心　心も言葉も及ばれず
常没流転の凡愚は　いかでか発起せしむべき

聖人が底下の凡愚と自覚せられて、我等をお導き下さった御恩を今さらのごとくありがたく感じる。

略文類に、

「然るに薄地の凡夫、底下の群生、浄信獲がたく、極果

証しがたし。何をもっての故に、往相の廻向によらざるが故に、疑網に纏縛せらるるが故に」

とある。薄地、底下の凡愚は、如来の廻向がなくては、何ともして見ようがないのである。いたずらに疑いの網にまとわれて動くことができぬのである。

しかるに、このような凡愚が清浄真実の信心を獲ることができたのは、全く如来の御力である。そこで次の文に

「いまし如来の加威力に由るが故に、ひろく大悲広慧の力に因るが故に、清浄真実の信心を獲しむ」

とある。実にこの如き凡愚が信心を獲られるということは、よくよく如来大悲の威神力を加えたまえばこそである

そもそも、この大悲を我等に知らせんとて仏は如何にお心を労したまうたことであろう。聖人はまた和讃に

大聖おのおのもろともに　凡愚底下のつみびとを
逆悪もらさぬ誓願に　方便引入せしめけり

嘆、人生の出来事はみなこの凡愚底下の私を大悲の恵みに引き入れたまうためであった。

念仏停止も、師弟の流罪も、畢竟愚禿親鸞にますますお慈悲を知らして下さるのである、また人にも知らせよとの思召しである。

「大師聖人もし流刑に処せられたまわずは、われまた配所におもむかんや。われもし配所におもむかずんば、何によりてか辺鄙（へんぴ）の群類を化せん、これなお師教の恩致なり」

一切経を五遍読む、世人は智慧の法然房をたたえたが、御自身は、十悪の法然房、愚痴の法然房、烏帽子一つきぬ法然房であると仰せられた。また御流罪の時も、

「この時にあたりて、辺鄙の群類を化せんこと莫大の利生なり」

と仰せられた。

両聖人のお言葉は、符節を合わせたようである。法然上人の御往生をお聞きになって、益々辺鄙の群類を導かれたのも決して無意味ではない、全く大悲の御思召にお従いなされた外はない。

而して親鸞聖人が法然上人を何とみられたか、これに対してご自身を何とみられたであろうか。愚禿鈔の題下に

「賢者の信を聞いて、愚禿の心を顕わす。
賢者の信は内は賢にして、外は愚なり、
愚禿の心は内は愚にして、外は賢なり。」

賢者とは、法然上人や善導大師のことであろう。此等の人は、内は賢にして外に愚を示したまうたのに、愚禿は、内は愚にして外に賢を現ぜんとするものである、との御自白である。

何ぞしらん、これ、いわゆる我が御身にひきかえて、私が、内愚にして外賢なことを知らせて下されたのである。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

日野左エ門の門前の雪も、そくばくの業とわかれば何の不足でもなく、よくよく五劫思惟の御恩を思われて寒さを忘れられたのである。

噫。我等は罪業深重、凡愚底下のいたずらものである。しかもその凡愚底下のもののために起したまう大悲の本願なれば、悪なればこそと、かえって御恩を喜ばしていただくのである。

五濁悪世のわれらこそ　金剛の信心ばかりにて
ながく生死をすてはてて　自然の浄土にいたるなれ

ことに晩年になられるほど聖人の御述懐が尊い、たびたび引く和讃であるが、最後のお筆に、

是非しらず、邪正もわかぬこのみなり
小慈小悲もなけれども名利に人師をこのむなり

との御告白は、我等の骨身に徹する御教化である。ここにいたって、我等が信仰を説くのなどの言葉の出る余地がない。

されどまた、

小慈小悲もなき身にて　有情利益はおもうまじ
如来の願船いまさずば　苦海をいかでかわたるべき
無慚無愧のこの身にて　まことの心はなけれども
弥陀廻向の御名なれば　功徳は十方にみちたまう

との御述懐をいただくときは、実にありがたい。大悲の御恵みの我等がために御成就下されしことの身にしみて、我等もおなじく聖人のいただきたまいし、弥陀廻向の御名をいただかして貰う身の幸福を感謝するの外はない。しかも聖人は、愚禿悲歎述懐と題されたおぼしめしをうかがうときは、何とも云いつくされぬ感謝のおもいに満たさるる

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

信的生活

池山栄吉

相対の価値

「曾無一善唯知作悪」の私達を、呆れず捨てず、若不生者の手に、むずととらえて離したまわぬ無碍絶対の大慈悲に、さすが我慢の頭も下り、言亡絶慮、おそれ入ったところ、これぞ真心徹到のすがたで畢命(ひつめょう)を期として念々相続する利他金剛の信楽は、ここにその端を発し、人生生活の絶対安定の基礎はここに確立し、愛欲名利の対象である何物をもってしても、かえることの出来ない絶対の価値ある心境は、豁然としてここに展開する。

価値の転換

絶対の価値ある心境が開闡された以上は、諸種の欲求に対するねぶみがおのずから従来のと違って来なければならない。かっては愛欲だの名利だのが、底の知れない力をもって、独占的に私達をとらえて暴威をたくましうしたものであったが、今は必ずしもそうばかりではないといえるわけは外でもない、私達は以前と違って、今では、何より大事な信楽の持主となっているからだ。

「そのかみ邪見におちたる人ありて、悪をつくりたるものをたすけんという願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをいいて、ようにあしざまなることのきこえそうらいしとき」

これをいましめられた聖人の御消息を味読すると、信前信後の価値の転換から生ずる生活の態度の推移がよくうかがわれる。

世をいとうしるし

「まずおのおのの昔は、弥陀のちかいをもしらず、阿弥陀仏を申さずおわしまし候いしが、釈迦弥陀の御方便にもようされて、いま弥陀のちかいをききはじめておわします身にて候なり。もとは無明の酒に酔いて、貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみ、このみめしあうて候いつるに、仏のちかいをききはじめしより、無明の酔もようようすこしづつさめ、三毒をもすこしづつこのまずして、阿弥陀仏のくすりをつねにこのみめす身となりておわしましあうて候ぞかし。しかるになお酔いもさめやらぬに、重ねて酔をすすめ、毒もきえやらぬに、なお毒をすすめられ候らんこそあさましく候え。煩悩具足の身なればとて、こころにもおもうまじきことを許して、いかにもこころのままにてあるべしと、申しおうて候らんこそ、かえすがえす不便におぼえ候え。酔いもさめやらぬさきになを酒をすすめ、毒もきえやらぬに、いよいよ毒をすすめんがごとし。くすりあり毒をこのめと候らんことは、あるべくもそうらわずとこそおぼえ候。仏の御名をもきき、念仏を申して久しくなりておわしまさん人々は、後世のあしきことをいとうしるし、この身のあしきことをば、いといすてんとおぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候え。はじめて仏の誓をききはじむる人々の、わが身のわろく、こころのわろきをおもいしりて、この身のようにては、なんぞ往生せんずるという人にこそ、煩悩具足したる身なれば、わがこころの善悪をば沙汰せず、迎えたまうぞとは申し候え。かく聞きてのち、仏を信ぜんとおもうこころふかくなりぬるには、まことにこの身をいとい、流転せんことをもかなしみて、深く誓を信じ阿弥陀仏をもこのみ申しなんどする人は、もとのこころのままにて悪事をもふるまいなんどせじと、おぼしめしあわせたまわばこそ世をいとうしるしにても候わめ云々」

(末灯鈔)

当然の驚異

新にひらかれた信楽の境地が、さまで大事なものだとは平生意識されてはいないが、今汝を世界一の金持にしてやろう、末代までの誉ある人にしてやろう、汝にこのさき千年、万年の寿命をやろう、そして絶世の佳人をあてがってやろう、ただそのかわり信楽の境を見捨てよ、といわれたとしたらどうかというと、まさかその間の取捨に迷うようなことはあるまいとおもう。これとあれとは、到底同一の標準ではかることの出来ない価値だ。一は相対であり有限だのに、他は絶対であり無限だからだ。

古来幾多の殉教者に見る悲壮崇高な態度はこの見地からすれば、けだし驚異すべき当然だとも云えよう。

煩悩あっての信楽

横目堅鼻の人体を具えている間は、他力の信を獲たのちでも、持前の煩悩はなくならない。「煩悩を断じなば即ち仏なり、仏のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさん」功徳の水と溶けながらも、氷は矢張り氷なのだ。が、その氷の溶けて行く推移こそ即ち信楽の味なのだ。氷あっての水であり、煩悩あっての信楽だ。

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし

罪障功徳の体となる　こおりと水のごとくにて
氷おおきに水おおし　障り多きに徳おおし

気圧と水温

あぶないいたずらに夢中になって、人の制止をきこうとしない幼児も、母の乳房が眼に入ると、しかけたこともそのままにして、忽ちそれにとりつくように、三毒煩悩の悪魔に駆使されている私達も、仏智にめざめたお蔭には「よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」としらせて貰って見れば、久遠の習気一朝にぬけがたしとは云いながらまさかこれまでのように、むきになってここを先途と悪戦する気にもなれまいではないか。片手に乳房をまさぐりながら片手に玩具をはなさぬよう、幾分遊戯の気味が注入されて来なくてはならない筈だ。

気圧の弱い高山では、湯ははやくたぎっても、温度はその割に高くない。

高楊子

武士は食わねど高楊子とすましていることの出来たのは一つは定まった禄をうけて生活の基礎が安定していたからだ。だから一旦、扶持にはなれると、浪人しても武士は武士だが、切取強盗は武士のならいと、前に正反対の態度に出るものもあったわけだ。

ただ世をいとえとあっては、とてもいといきれる私達ではないのだが、現に甘露の法味に満腹して、生の安定の基礎がすわった半面には、幾分欲求に対して、恬淡（てんたん）な態度がとれるようになるのは、むしろ自然の趨勢（すうせい）といえようではないか。

転化作用

公のみ私を忘る、などいう崇高な道徳は、聖賢の徒ならばいざしらず、あけくれあさましい煩悩につきまとわれている私達のなかなかよくする所でない。

自分の腰かけている椅子は、自分の力ではもちあがらない。他力の慈悲に腹ふくれてあてにならない婆婆がようよういとわれだして執着の腰があがりかかると、ここに幾分良心の椅子を動かせるした地がつくられるのだ。

それは自分の高潔な人格が然らしめるのではない。煩悩の衆流を智慧のうしおに一味にする大信海の転化作用によるのだ。

尽十方無碍光の　大悲大願の海水に
煩悩の衆流帰しぬれば智慧のうしおに一味なり

無碍光の利益より　威徳広大の信をえて

必ず煩悩の氷とけ　即ち菩提の水となる

奸詐百端

とはいうものの省みて心の奥をみつめるとき、実に慚愧と歎嗟にたえないものがある。

他力真宗を奉ずる身でありながら、真実の心とてさらに無い。おもては賢善精進に見せかけても、内心は虚仮不実をもってみたされている。たまたま自分にも、こればかりは純な利他の動機からやったと思われることがあっても、裏に廻ってみると、さまざまのいやしい自利の衝動が尻おしをしていないことはない。奸詐ももはし身に満てり、いやしくも内省に徹底した人ならば、誰かこれを否定し得るものがあろう。

蛇蝎奸詐のこころにて　自力修善はかなうまじ
如来の廻向をたのまでは　無慚無愧にてはてぞせん

自然のことわり

信後の生活が、信前のそれと著しく違うところは、自分の心の真相が、浄ハリの鏡にかけたように、まざまざと見えすく点にある。

「悪性さらにやめ難し、心は蛇蝎の如くなり」と、曇った眼にも映ずるのは、恐らく弥陀の智慧をたまわったしるしとも見られよう。そして「まことに煩悩の興盛に候にこそ」と、われながら呆れはてるなかから「かかるあさましき身も本願にあいたてまつりてこそ、げにほこられ候え」と、とっくり安心させてもらえるのが、信後生活の常の姿で、その結果「わろからんにつけても、いよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱の心もいでくべし」とあるように、柔和忍辱なり、勇猛精進なり、それぞれ場合に応じた当為の心が起って来ようというのは、さきに言った大信海の転化作用に属することなのだから、私達自身の方では、はたして善い心が起ってくるかどうか、「知らず識らず帝（みかど）の則（のり）に従う」ようになれるかどうか。それは如来の御はからいにまかせまつるほかはない。

もとより私達は、そうありたいのは山々だが、しようと思えば出来ると信ずるには、余りにもよくわが身の程がしられているのだ。

弥陀智願の広海に　凡夫善悪の心水も
帰入しぬれば即ちに　大悲心とぞ転ずなる

底力のある生活

あさましい心の陰影に驚かれるのは、一方に弥陀の心光のお照らしをこうむっているからだ。「本願にほこるこころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにて候え」。煩悩具足と信知して、且つ愧じ、且ついたむにつけ「他力の悲願はかくのごときのわれらがため

なりけり」と、いよいよたのもしくおもわれる。
信後の日常の生活は、時々刻々にこの気分を繰返すことだ。
「信心浅けれども本願ふかきがゆえにたのめばかならず往生す。念仏ものうけれどもとなうればさだめて来迎にあずかる、功徳莫大なるゆえに」
意馬心猿（いばしんえん）と乱れ狂い、秋の空のように、猫の眼のように変転きわまりのない私達の心にも、如来からたまわった信心ばかりは変りがない。これこそ私達の唯一究竟のたのみの綱だ。私達は絶えずこの綱に引かれて、心強い、底力のある生活をさせていただくのだ。

清浄光明ならびなし　遇斯光のゆえなれば
一切の業繫ものぞこりぬ畢竟依を帰命せよ

信味讃詠

清水凡禿

子等もなくはらからもなき身にしあれば、法の友だちありがたきかな
ひたすらにただ念仏を唱えなん、なるゆくすえのことな思いそ
みたされぬ者慕いあいただなみだ、救いのみ手のそこにありしか
喜びも悲しみもただとけ合うは念仏のみの世界なりけり
うつし世に唯光聞く道こそは末とおりたる力なりけり
ひたすらにわが身の罪に泣くきはに呼びます親の声聞ゆなり。

（辞世）

大願の船はあわてる要もなし　ゆられるままに、風のまにまに。

新年
初日の出　久遠劫来のむかしより
どこまでも限なき春の光かな

春
はずかしや春日に目立つごみほこり
はからいも舟の中なり春の海
父に似し羅漢ありけり緑り寺

夏
法の友、また一人ふえて涼み台

秋
妙法をここにも聞くや虫の声

冬
念仏の一本道や雪の原

（法悦抄より）

日系軍人と裁判

——信は力なり——

木村義文

ハロー　パパサン　ママサン　十二月二十九日ノテガミガ一月六日キマシタ。ホントニウレシイデシタ。ママカラテガミガクルト、ジツオ（実雄）ハ、ヨロコビマス。ミンナガマメデ（元気で）アンシンシマシタ。ジツオモマメデスカラアンシンシナサイヨ。ニサン（兄さん）ハヨクヒトリデ、カリング（ブドウ樹の枝おろし）オヨクスルネ。パパモエライノデ（に）マイニチヤリマスネ。パパガヒルカラ　タウン（町）エイクノデ、ジツオハウレシイヨ。
ママモアンマリハタラカンヨニシナサイ。ママガ　ホトケサマオマタオクル（送る）ノデ、ジツオハヨロコンデオリマス。
ホントニ、トラレタトキニ、ジツオハオコリマシタ。ホトケサマオジツオカラトツタ（取った）トキニ、ホントニナサケナイデシタ。イマ、ジツオハ、ホントニホトケサマノコトオ（が）ワカリマシタ。ホトケサマハヨクシテクレルノデ、トラレタトキジツオハ　バンニナキマシタ。
イマカラヒト（人）ガ　カモタラ（からかう）コンダ（今度）トラレマセンヨ。ジツオハ　ママガユタヨニ（云ったように）ネンボツ（念仏）オユテ（云って）オリマシタマタナミダボツオ（なむあみだぶつを）ジツオハ　ココロデマイバンユテ（云って）オリマスヨ。
コトシ、ミンナハサビシイトシオ、トリマシタネ、ジツオハ、パパ、ママガ（に）プリセント（プレゼント）オアゲテ、パパ、ママガスキヤテ（好きだから）ヨロコビマシタ。コンダ（今度）ニイサンニモ、ナンカオクリマスヨ。ローイ、レーイ（二人の兄弟の名）ガマメデ（元気で）オルノデ、アンシンシマシタ。パパ、ママ、ニイサンガヨクローイトレーイオ、ミニイクノデ（兄弟共に入営中、面会に行くこと）ジツオハヨロコビマス。ジツオガ、ホーオード（米国内の兵営の名）ニオルトキニ、ママタチガクルト

キニハ、イチバンウレシイトキデシタ。マタ、ローイ、レーイモ、ウレシイデスカラ、ヨクフタリオ、ミニイテ（行って）ソーダイヨ（頂戴よ）フタリハ（二人は）サビシイカラ。

コレデシマイニスルカラ、マメデ（元気で）オンナサイヨ。　一月六日　ガッショー（合掌）　ジッオ

ダイジナ　オヤ

パパ　ママ

読者は、誤字のあるこの片仮名文字でかかれた、たどたどしい手紙を読んで、どう感じられたでしょうか。『ハロー、パパサン、ママサン』という書きだしの感じから、発信人が日本内地の者でないことを感じとられたことでしょう。そして、文体から広島ナマリに気づかれたと思います。

そうです、この手紙の筆者は、広島県出身の両親をもつアメリカ生れの三世兵。今ドイツに駐屯中の松原実雄一等兵（二十二歳）がその両親にあてた手紙なのです。しかし手紙の内容は、読者にはよくおわかりでないと思われるふしもありますので、すこし註解しましょう。

ある日のこと、松原一等兵の所属する中隊内で戦友が、何かのことで刃傷沙汰におよび、ついに一人が死亡したことがあったのです。その時中隊の兵士は全員真っ裸にされて、身体検査をされました。松原一等兵がズボンを脱いだとき、出てきたのが、肌身はなさず持っていた小さな長方形の袋包みでした。

朝鮮からまわされた新任の検査係の某軍曹の眼には、この袋が奇異に感じられたのでしょう。彼にその正体をたずねました。彼は、南無阿弥陀仏の六字の名号であること、出征にあたって母親が自分で贈ってくれたものであることを説明しましたが、軍曹は〃こんなものをもつ必要はない〃と云って取りあげてしまいました。その時の軍曹の言葉と態度が、彼をどんなに恐らせ悲しませたか。後日、兄にあてた英文の手紙に、そのときのことをこまごまと書き送ったということですが、私には詳細なことはわかりません。

しかしこの新任の軍曹が、名号をとりあげたばかりでなく、彼をひどく憤慨させた裏には、軍曹がまえにきっと日本兵と戦った経験者か、或は何か日本人にふくむところがあって、日系人を好まぬ感情があったにちがいないと、松原一等兵は父に書き送っているのです。

ともあれ、このような出来事が、たとえ他の仏教徒の日系兵に起ったとしても、大抵は〃しかたがないよ〃と云ってそのまますましそうに思える小さな事件でしたが、松原一等兵には、そのままではすまされぬものがあったのです。

米国軍隊の中にはキリスト教の従軍僧はいますが、仏教

僧は一名もいないのです。それだけに仏教徒である二世兵士は、精神的には実に淋しい思いをしているのです。そのうえ従軍僧のかわりとなって彼等を慰める英文仏書やパンフレット類が、悲しいことに米国仏教界にはまだないのです。ただ一つ、加州中部のフレスノ市にあって、病軀をおして、文書伝道にはげんでいられた京極逸蔵師（すでにご逝去になった）の個人発行の英文仏教誌『ツリラトナ』が出征兵士に無料で配られて、これが兵士の精神的支柱となり、むさぼり読まれているということは、師にあてた兵士の感謝の手紙が続々と届いていることで分りましょう。彼等はこのような境遇におかれているのですから、名号はほかの何物にもかえられぬ尊いものであったのです。

松原一等兵は、この事をすぐに中隊長に上申しました。そして中隊長と共に、軍曹に、なぜ自分の信ずる宗教の礼拝の対象の仏さまを取りあげたかをなじりましたが、事すでにおそく、名号は破り捨てられておりました。彼はカンカンに恐りました。余程腹が立ったのでしょう。〃殺してやりたいとさえ思った〃と書いておりました。中隊長はわけを師団長に上告しました。すると師団長はこれを軍法会議にかけたのです。その上、師団長は、中隊長とともに、松原一等兵のために証人として法廷にも立ってくれましたしかも自分の不徳を松原一等兵にわびてさえおります。

裁判の結果、新任軍曹は六ケ月の重営倉と六ケ月の給料停止処分をうけることになりました。そのうえ、懲役がすめば不名誉な除隊がまっているという判決を言い渡されました。このことがあって彼は仏さまのないことを非常にさびしく思いました。さっそく求めて送ってくれるようにアメリカの母にたのみました。母親がすぐ送ると書いた手紙の返事が〃ママガホトケサマオマタオクルノデ　ジッオハヨロコンデオリマス〃という喜びの文面です。

彼はお名号を捨てられたことが、彼の信仰を踏みにじられたと感じたのです。彼の仏を信ずる深さが、お名号を破棄されたことがらを小さな事柄として黙殺することを許さなかったのでした。だからお名号をとりあげられたときの悲しみと、お名号を再び頂けるという喜びが、彼の手紙の文面にはっきりとでております。自分の信念をどこまでも守りぬこうという勇猛心が、この事件を師団長にまで上告させたにちがいありません。そして中隊長や師団長までが法廷に立ってくれたということは、彼が常日頃、上官から信頼されていたことも、上官を動かした理由の一つであったと思われます。それ程彼は中隊での模範兵だったのです。

彼の戦友、中野敏夫伍長が、ロス市から発行される英文二世ウイクリー、クロスワード誌に執筆して『軍の賞讃を

うけた松原実雄』という題で、彼の人となりを紹介し、彼の上官が「彼は常に軍人として人一倍勤勉でかつ優秀であるが、軍隊にあるばかりでなく一市民としても必ずや模範市民となるであろう」といった言葉や、聯隊長からドイツ駐屯の全聯隊に課せられるほどの大事な野戦作戦問題をみごとに答えたことは、下士兵にとっては、いまだかってないことであり、それはよく訓練された士官におとらぬほどすぐれた能力であると、たたえたことなどを引いて「このような戦友をもつことはわれらの誇りであり、いな全中隊のほこりでもある」と結んでおります。

彼が模範兵となったことも、仏を大事にし、親を思い兄弟をいたわるやさしい心根の彼なればこそとうなずかれますが、そのことは彼の手紙からはっきり感じられます。

彼は英文は書けても、自分の気持を充分に伝えうるほど巧みな日本文は書けないのです。これはほとんどの若い二世や三世がそうなのです。英語の世界で教育されている彼等には、当然だと思って頂かなくてはなりません。中にはすばらしい日英両国語を使用する者もいますが、それは極少数です。これに反して一世には英語が苦手なのです。だからいくら巧みな英文で書いてもピンとこないのです。たとえ誤字だらけのたどたどしい日本文でもよい。日本語で書かれた手紙なら親にとって何よりも嬉しいことなのです誤字だらけの文の中からも我が子の気持をはっきりくみとられるからです。

彼もこうした親の気持を察して、一生懸命にかいたようです。終りの『ガショー』（合掌）というのは、米国の仏教徒間には、敬具や不一などの代りに合掌と書く嬉しい習慣があるので、彼もその通りにガショーと日本語で書いたのでしょう「ダイジナオヤ、パパ、ママ」という表現には心打たれます。我が子から大事な親と呼ばれた親が幾人いるでしょうか。

ここで一つ、読者に知って頂きたいことがあります。それは、たった一個のちっぽけなお名号を破棄したという行為が、六ケ月の懲役と減俸と、不名誉な除隊に値するほどどうして軍隊内で重大な事件として取扱われたかということです。このようなささいなと思われる行為に対して、かかる刑罰が与えられるということは、米国民にとっては当然かもしれませんが、我々日本人、とくに仏教徒にとっては正に驚きではないでしょうか。

信仰の自由と人権の尊重を標榜する米国民は、各人の信仰する神聖な礼拝の対象物を破棄するなどは、その人の信仰を冒瀆し、宗教の自由を破壊する行為として受取られたのでありましょう。米国内の信仰深いキリスト教徒は、自

分の宗教を守り抜くとともに、また他人の信仰を尊重するのであります。

私は次のような心あたたまる話を聞きました。ことの起りは、日本が敗戦となり、米国中部地方出身の某大佐が、朝鮮に進駐したときのことです。大佐の住宅としてすでに空屋になっていた日本人の宏壮な邸宅が接収されました。

大佐が家に入ってみると座敷の片隅に、高さ八尺余もある長方形の黒塗の木箱が据えられてあるのです。多分持主の日本人が内地に引揚の時、重いのでそのまま放任していたのでしょう。扉があり、開くと内側はからっぽであったが箱の内側は全部金色に塗られ、屋根らしいものがあり、数本の柱には精巧な金具さえはめてあります。然しその木箱が何であるか、何に使用されたものか、見たこともない大佐には判断がつかぬ。とも角、相当高価な品で、大切に取扱っていたと察せられたのみで、捕獲品として破損せぬよう特に入念に包装して郷里の夫人の許に送られました。受取った夫人もさっぱり分らない。やがて大佐が帰国したのでこれをどう始末するかが問題になり、実用にもならぬし、壊すこともできないで、正体が分らぬままに博物館に寄贈することになった。

ところが或日、夫人は大分たまった旧いライフ誌を処分しようと手にして、何心なく開いた個所が、偶然にも、かって仏教団が米国開教五十周年記年大法要を厳修した際ライフ誌にのせられた、阿弥陀仏の本尊を正面に各開教使の勤行の写真であった。夫人は、おやこれは木箱の内部と同じ造りだと感じたので、ライフ誌の解説を読んだ時、これこそ仏教徒の尊重する仏壇であるとわかった。夫人は熱心なキャソリック教徒なのですが、木箱が仏壇と分らなかった時博物館寄贈を強く主張していたのです。

それが仏壇と分るとこんどは寄贈中止を主張し始めました。夫人の考えは、自分はキャソリック教徒であるから仏壇には用はないが、仏教徒にとっては神聖なものだから、博物館で見世物にしたり、粗末にしてはいけない。今立場をかえてキャソリックの法具を異教徒によって粗末に取扱われたらどんな気持がするか。これは時期を見て仏教徒の手に返したいというのです。そして大切に保管された仏壇が不思議な因縁から仏教徒の手に渡り、ご本尊も迎えられ朝夕礼拝されることになりました。

米国軍隊に、各人の信仰を冒瀆する行為を罰するという軍則は恐らくないが、いま松原一等兵の事件に対して採られた軍隊の態度は、明らかに宗教尊厳の立場からの処置のように考えられます。

仏教は米国に於ては何と云っても異教であり、小数民族

の宗教として知られているだけで、大部分の米国人は仏教を知らないのです。昨年、米国加州スタンフォード大学に出講された東大の中村元博士が「アメリカ人の仏教の知識は、例えば教授夫人が、仏教でも分派がありますか、キリスト教のように。それは面白いと云う程度です」と印度仏教学研究誌に感想をのべられている通りです。こんな調子ですから、師団長の態度や軍法会議の判決は松原一等兵の喜びにもまして、我々在米仏教徒にとって大きな喜びであります。なぜなら、我々は米国に於て信仰の自由を保証される一つの実例と思えるからです。

由来、仏教はその寛容の精神をもって、他教にすぐれた風格があるといわれます。そうですけれどその寛容の中身がどうでもいいという放縦さと卑屈さにかわってきたのではないでしょうか。だから日本仏教徒は他人の宗教を云々しない代りに、自己の宗教をあくまで守りぬいた松原一等兵の如き気概にかげ、それと共に自己の信仰を冒瀆されるようなことがあっても、案外平気でいるのでないでしょうか。もし私の云うことが杞憂（きゆう）にすぎないのであれば、これにこした喜びはないのであります。

（昭和二十八年四月、プデイスト・マガジン発表）

木村師は、現在フレスノ別院　輪番。アドレスは
694 East Wrenwood Lane, Calif, 93710, U,S,A

隨筆集

宮城道雄

眼の見える人は、職業の選択にも私共よりは自由が興えられている。自由は興えられているが、それだけに若いうちは自分の現在ある地位や職業に不平不満をいだいて迷うことも多いと思う。

その点は私共盲人はしあわせである、と云い得る。私達は唯この道を往くより外はない、迷ったりする余地はない、ただまっしぐらにこの道を進んで行こう。この一念が私を今日あらしめてくれたといえるのである。

○

修業中は馬鹿になっていなければ上達しない。馬鹿という言葉をいいかえれば、ものにこだわらない素直なことである。理屈っぽいのが一番修業のさまたげになる。

その次に戒めなければならぬのは慢心である。高慢な気持が出たら、その人の芸はそこで止まってしまう。勿論、自信は必要である。しかしそれは飽くまで謙遜の中の自信でなければならない。謙遜のブレーキのかからない自信はやがて慢心となる。慢心が出るのはまだ自分の芸が幼稚な証拠で、芸が進めば進むほど慢心はできなくなるものである。

念仏詩抄

木村無相

聞くのである

※先生仰せに
〃音声において
音声を超えた
無声の声を
聞くのである〃

※松原致遠先生

ああ
聞くのである
聞こえるのである
――

ああ
聞くのである
遇うのである

念仏において
願心を聞き
念仏において
無碍光に遇う

ああ
願心よ
無碍のみ光よ

称えつつ

称えつつ

ああ

称えの奥に
聞き入れば
そこにぞおわす
本願の弥陀

聞きたや

香樹院仰せに
〃聞きたや
聞きたやの
思いのおこるのが
迷いの業の
尽きるもといなり〃

聞きたやの思い
法の動き
ああ
この我れにおける
法の動き
ああ
聞きたや
聞きたやの
法の動きよ——

ああ　願心よ

ああ
助かられぬわれの
口業をかつて
あらわれたもう
み名において
助けんとおぼしめし
たちける願心を
聞くのである
聞かしめられるので
ある

ああ
不可思議の
願心よ——

無信の者に

親鸞聖人
唯信鈔文意に——
〃釈迦如来

よろずの善の中より
名号をえらびとりて
五濁悪時・悪世界
悪衆生・邪見・無信の者に
与えたまえるなりと
知るべし——〃

ああ
法は　ナムアミダブツ
機は　悪衆生・邪見
無信の者——

ああ
無信の者に
無信のわれに
なんの信疑の力があろうぞ
ただ
与えられたまま
ただ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ただ　ただ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

信者

わたしが信者で
あるならば
ナムアミダブツは
いらんでしょう
念仏なくては
おれない身——
信者であろう
ハズがない

信者はただただ
如来さま
信者はただただ
如来さま
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

信の旅の二つの枝折

花田正夫

新潟の佐藤強三郎さんに渡された近角常音先生の御絶筆として、昭和二十六年六月一日筆のものに、

〃「弟を子供の時より育てたけれども、彼に別段不足はなけれども、彼奴が、いつ迄も、いつ迄も我慢の止まぬのには、あれは困ったものだ、可哀想なものだと兄さんが愚痴をこぼしていましたよ」

と、この姉（きそ子夫人）の一言には、初めて御慈悲の片鱗を知らせて頂きました。〃

とある。このことは常音先生の御法話には必ずと云ってよい程くりかえされたものである。私のお聞きしたままにこの前後を誌すと、常音先生が金沢の第四高等学校を中退されてから、東京の求道会館で、常観先生のもとで過ごされるようになった。

先生は「始めの頃は、自分は出来そこないの人間であるが信仰を獲ると兄のように立派にやれるだろうと思って、道を求めていたが、それは、信仰を利用して自分をよくしようとしていたので、そのことの間違いをほどなく知った。

然し、その後、度々これが信仰かと思うような経験もしたが、そのあとから駄目になってしまった。そうこうしているうちに三十近くなった。その頃は、自分はとても信心など獲られる人間ではないと、半ばあきらめて、信仰上のことで兄に尋ねようともしなかった。兄も面と向って何も話してはくれなかった。」

こうした或日の茶飲み話に、初めに掲げたようなことを嫂のきそ子夫人から聞かれたのである。この時先生は、

「自分は信心がない、兄は立派にやっているのだから、兄の言うことは何一つ反対したこともなく、それに従っている。それなのに、我慢が止まぬ、とは、兄貴も勝手なことをいう」

と、腹が立って面白くなくなり、会館を出て街を散歩していられた。そのうちに、

「待てよ、物の値段は買い手がつける。自分ではよいと

思っていても、兄の目に、我慢がやまぬ奴とうつったのでこれは仕方がない。それにしても、愚痴をこぼす程に思うのであれば、世間一般の兄弟なら、お前と一緒に暮すのは御免だ、出て行け、と云うのが普通なのに、あれは困ったものだ、可哀想なものだ、と思ってくれるとは！これは有難いことだと、一点兄の親切が身にしむと共に、この心が親鸞聖人の心であった、そのままに弥陀仏の大悲心であると、段々大きく強いひかりを仰ぐようになった。そこで再び自分を省みた時、兄の言う通り素直に従っている、よくしていると思っていたことが、我慢であったと知れ、成程自分の全体が我慢のかたまりであった、これを見抜いて可哀想といって下さるとは！」

と、御慈悲の片鱗にふれられたのである。

「その時も、兄に何も打ち明けず、数日すぎると、兄の方から、お前、何か有難いことに気付いたのか、嬉しそうではないか？と聞かれて、初めてありのままを話すと、兄も非常に喜んでくれ、これから日曜講話に、三十分位前席をせよとのことであった」

以上が、常音先生の最初の信のお気付きであった。これから、御自分の懺悔話をされると、信者の人々も非常に喜んで聞くという風で、先生は、有難い、有難いの生活がしばらく続いた。

そうした中で、伊恵子夫人に、お前ももっとよく聞け、と勧められると、奥様は、一生懸命に聞いています、これ以上どうするのですか、と反撥されるようになり、外では有難い〳〵と喜ばれるが、御夫婦の間は面白くないことが多くなり、又、僧侶の人が沢山集るような場所で、みんな不徹底な者ばかりでないか、と和合僧を破るような心もおこり、他人は他人で、何だ近角が、ひとり得たような風をしてと、向うもへだてるという始末になった。

さて、一事が万事で、あちらでもこちらでも失敗の連続をされるについて、とうとう「自分は一生やくざ者で終る人間だ。兄は信仰で立派にやっているのに、その邪魔をしている。一層会館を出て、前から好きだった子供の玩具屋でもやって、街の隅でくらそうと決心した」とのことで、それを思いきって常観先生に申出られた。すると、「なんだそんなことで苦しんでいるのか」と云われて次の事、

〃「一旦分ったと思うては、また間違い〳〵、それだから何処までもお呆れないお慈悲でないか」との一言は、現に間違って居る私の心には鉄砲弾の如く命中して、真にお呆れ下さらぬ御方は人生唯このお一人なることを知らさせて貰いました。〃

と書き遺されたのであった。常音先生がこの申出をされるまでには随分御思案をせられたので、可成り堅い御決心

からであったが、常観先生のこの一言で、青菜に塩でへたへたとなってしまったとのことであった。

常観先生はさらに語を継がれて、

「親鸞聖人は、歎異抄九章にあるように、よろこべず、浄土がこひしく思えぬ唯円房に、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり、と唯円房と御一緒して下さっている。弥陀仏はここまでおいて、でなしにここまでおりて来て下さる方だ」

というようなことを述べられた由であった。

そして「信仰によってやりそこなわぬ様になるのでなしに、相変らずやりそこないのやまぬ者を、それだから見捨てぬ、呆れはせぬぞ、とあらわれて下さるのだ」と常音先生はいつも仰言っていた。

○

大正十五年に胃癌で亡くなられた安波勲八氏（眼科医）は、東大医学部時代から近角先生のお教をうけ、郷里の別府で開業なさってからは東陽和上のおそだてをうけられ、又近角先生に御縁の深い、同信の麻生介様（内科医）や和才誠司様（軍人）等と信仰座談会を開いて聞法を続け、大正十二年に信仰にめざめた方である。

惜しいことには十五年には浄土にかえられたので、信の生活はまことに短かったのですが、其間の影響は大きく、稀れな真人であった。私は昭和十五年頃『信仰体験録』を拝読し、今日に利るまで大きな導きを頂いている。

さて安波氏の言葉に、積極的慈悲と消極的慈悲ということを特筆せられている。積極的慈悲とは、仏様のおかげでああなった、こうなれたと喜ぶことである。たとえば子供が学校に行けるのは、親の苦労のおかげである。そのことは種々な人から教えられるし、それに違いはないが、私共の欲望は無限であるから、自分より恵まれた才能やら境遇にある友人を見ると不足がおこる。

その時「下みてくらせ、上を見るな」と言われる。成程自分より恵まれぬ友も多い、然し、上にある人を見るなといわれても、内に限りない欲望を持つ身には、それが見えて来るのである。そこに不平があり不満があり、恵みをよろこぶのも喉元すぎる時だけとなる。

次に、消極的慈悲とは、仏様のおかげを蒙っても、依然として愚かで、悪がやめられぬ、どうにもならぬ身であるから一切から呆れられ、捨てられて、ひとりぼっちがその定めであるのに、その身をお見捨てなくお慈悲をそそいで下さるのは弥陀一仏と、ああもなれず、こうもなれぬ身にそそがれる無限の慈悲が仰がれるのである。

さて実際問題となると、この消極的慈悲が本当の力となり、たのもしいのである。譬えば、不治の病になった青年が、薬を浴びるほど飲んでもよくならず、親が造ってくれ

る滋養食も身につかず、段々おとろえて行き、友達の多くは、上級学校に進んでいくのに、自分は恢復もおぼつかないとなり、親をはじめあらゆる人々の親切も空しくなる時、一切の人々があきらめ、手を引いても、親一人はそのよくなれぬ子を何処々々までも護り続ける。その親の慈悲の極限を消極的慈悲と安波氏は云われたのである。

安波氏の、地上にのこされた最後の言葉を掲げよう。

○

大正十五年八月十八日

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

私は永らく御厄介になりました、イヨイヨ臨終も近づきお話も出来ませぬが、有縁のお同行へ最後のお別れのお礼を述べさせていただきます。（称名）

たまたま行信を獲ば遠く宿縁をよろこべとの親鸞聖人のお言葉がありますが、私の仏法を聞き、仏様に出遇わせていただき、他力の大安心を得させていただきましたのも、みんな全く宿縁のお蔭であります。（称名）

私はもはや食べ物も咽を通らず、飲み物も欲しくない、イヨイヨ臨終も近づいたことと思うが、幸に平素いただいて居った信仰の、間違って居なかったということを、ますます深く味わうのであります。（称名）

私は平素の時は、お慈悲を喜び、死に直面しても、平気であるとか、安心であるとか、大きなことを云うておりましたが、イヨイヨとなりては病苦に責められて、喜ばれもせず、念仏も出ず、ドコドコまでもツマラヌやつであるがこの者をドコドコまでも見捨てずに、相手にして下さる仏様の御真実によって満足させて頂き、このドコまでも仕様のない私を、相手にして下さる仏様のましますと云うことが事実であるから、仏様の本願力によって、私の往生させて頂くと云うことも、またさとりを開かせて頂くということも間違いないのであります。この信念は最後の近づくにつれ、いよいよはっきりさせて頂きます（称名）

私がこの尊いお慈悲にあわせて頂きましたのは、全く宿縁のお蔭であります。皆様もどうかこの仏様のご真実に気づかせて頂かれんことを、最後のお別れに当りお願い致します。これが私の永らくのお世話になった皆様へのお礼であります。（称名）

なお終りに私のなくなった後は、頼りすくない妻や、いとけない子供や、年老いた老母の事は皆様に呉々もよろしくお願いいたします。合掌。

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　（文責筆記者）

このお話をなさると間もなく往生をとげられましたが、その絶筆としてのこされたものは

「仏の慈悲を有難く思える様になった事が有難いのではない、有がたく思えぬ奴を相変らずお相手下さることがありがたい事である

聞名院　釈正信書、大正十五年初夏。」

であります。いよいよとなられて、仏の消極的慈悲を仰がれて、そのたのもしさを随喜されたのであります。

以上両先生の信の歩みの中に、二つの大きな枝折りを頂き、摂取不捨の真言の力強さをあらためて信嘗させて頂きました。

○

耆婆の薬童子

医王の耆婆が人の病を治するには、薬草を採って童子を作る。その形はなはだ端正にして世に稀れなり、生れたばかりの童子に同じ、行住坐臥自在なり。

病人来ればこの薬童子と遊ばす。すこし力ある病人は童子と共に行きつもどりつしてたわむる。また坐する病人には共に坐し、病重くして寝ている病人には薬童子を抱かせる。かくして自然に薬効あらわれて万病治せずということなし。

芭蕉のことば

この道に古人なし

俳諧は三尺の童子にさせよ、初心の句こそたのもしけれ

○

つらつら年月の移りこし拙き身の科を思うに、あるときは仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籠祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を労して、暫く生涯のはかりことさえなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。

○

独り住むほど面白きはなし。長嘯隠士の曰く、客は半日の閑を得れば主は半日の閑を失うと。素堂この言葉を常にあわれぶ。予も亦。

○

人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わずかに二十余年なり。初めの老の来れること、一夜の夢の如し。五十年六十年の齢かたぶくより、あさましゆうくずおれて、宵寝がちに朝起きしたる分別、何事をかむさぶる。愚かなる者は思うこと多し。

友なきを友とし、貧しきを富めるとして、五十年の頑夫自書し、自ら禁戒となす。

とうしび

聚墨生

篤く三宝を敬え、四生の衆帰、万国の極宗なり
何の世、何の人かこの法を貴ばざらん
（聖徳太子憲法二条）

英国の歴史家のトインビーが二十年前来日した時『歴史の教訓』と題して次のように語った。

「一九四五年に日本は転落したが、そのうちで最も重大なことは、戦斗力と帝国の転落ではないと思う。一番重大なのは、明治時代に打ち立てられたイデオロギーの転落であった。それは突如としてガラガラと崩れ去った。そして日本人の心の中に大きな精神的空洞が出来た、それを埋めるものは何であろうか。

私の所信によれば、そのことが今日の日本人の当面している最大な難問である。これは世界中が興味と関心を寄せている問題である。何故ならば、その問題は日本だけに特有な問題ではない。我々の現代では、近代科学という知能力の爆発的な発達のために、伝統的なイデオロギー、哲学、信仰のすべてが、その台座のうえからふり落されたのである。何らかの理由のもとに、今や人類はすべて、その精神生活の新しい基盤を探し求めている。」

さて、残念なことには、今なおそれは未解決で、表面にお仕着せの民主主義を装っているにすぎない。この秋、聖徳太子の憲章が強く私共の心をうつ。太子の勧められる三宝とは、釈尊にあかしせられた無我の真実道である。それは万人のよるべ、万国のもといで、時代と民族を超えて常に貴ばれる絶対にして普遍な大道である。しかも太子御自身が「それ三宝によりまつらずば何をもってかまがれるを直うせむ」と唯一のよるべとされている。

この太子の御目に、徒党を組んで互に争い、平和を乱す者、人と人と信を失って疑心暗鬼に悩む者、賄賂が横行して公道がかくれる等々を到る所に見出され、われひと共にこの真実道に帰しまつるほかに救いのないことを徹見されて、悲心切々としたお勧めである。

太子の滅後千三百年の歴史に、国をあげて難関にあう毎に、期せずして太子をお慕いする声が起っている。今こそ篤く太子精神をうけて、絶対の真実道によって日本人の心の空洞が解消されねばならぬ時である。

（昭和五一年九月二六日、中日新聞）

あとがき

歳旦にまずおとずるる念仏かな
念仏をあるじとせばや三ケ日
白道に手をつなぎたる三日かな

年頭、池山先生の三句を心に浮かべ、お念仏のお催促をいただきました。

顧みれば、戦後、心臓筋肉障害で蓬戸不出の生活中に

生かされて生くばかりなりみ仏の
ふかき誓のあるにまかせて

と腰折一首ものして、生活のすべてを小冊子慈光に托して今日に及びましたが、諸先生や誌友の皆様の御念力に支えられて二十九巻になりました。山村暮鳥の詩に

どちらにむいておがもうか
陽は西にしずみ
月は東にのぼる

とありますように、年頭、十方に向って、皆様に御礼を申すばかりであります。私も七十三になりましたが、生ける日のしるしとして続けさせて頂きます。

○

近角先生の「底下の凡愚」は、聖人が掲げて下さった法燈の下に、御自身を見出され、仏恩をいよいよ渇仰せられたものであります。

池山先生の信的生活は、心光照護の下に、人生が転成される有様を、先生の信的実感をそのままにお書き下さったものであります。先生は四十二歳の時念仏に帰入せられ、次いで奥様の亡くなられた記念にドイツ語歎異抄、お母堂を失われた記念に意訳歎異抄を公にされ、次いで、生の記念として絶対他力と体験を出版せられたのであります。その中からこの項を掲げました。

木村義文師は、北米カリホルニヤ州、フレスノーに居られて開教使として永年活動して下さった方であります。目下、日系の二世、三世の方々のために英文仏書を企図され定年後の大きな仕事とされています。本稿は、師の著書の中から頂き、私共へのよき教とさせて貰いました。

木村無相さんは、腰痛でこの寒中は冬ごもりとの由であります。「釈迦如来よろずの善の中より名号をえらびとりて、五濁悪時・悪世界・悪衆生・邪見・無信の者に与えたまえるなりと知るべし」の唯信鈔文意の仰せを深く身にうけて喜んでおられる音信を貰いました。

〈御案内〉

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、午后一時半。　南区駈上町二の八八。花田宅。
市バス、新郊通り一丁目下車。
地下鉄、新瑞橋終点下車。
名鉄、呼続下車

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午后。昭和区小桜町二丁目四番地
市バス、北山町、又は御器所通り下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光　第二十九巻　第一号　昭和五十二年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可